幹部学校航空研究センター新設への祝辞と期待

航空幕僚長
空将　齊藤　治和

幹部学校創立60周年及び目黒基地開庁20周年の記念すべき年に、航空研究センター（以下「センター」という。）が新設されますことを心からお慶び申し上げますとともに、一言お祝いを申し上げます。

本センターは、平成16年から約10年にわたり航空自衛隊（以下「空自」という。）を挙げて検討してきた結果、国内唯一の航空防衛力に関する調査研究の専門部署として新設するものです。

これまで、幹部学校や各術科学校においては、NCW（ネットワークを中心とした戦い：Network Centric Warfare）やドクトリン（隊務を適切かつ有効に遂行するための基本原則）等に係る調査研究において一定の成果を得てきたところですが、将来の事態に備えるための調査研究という観点から見ると、研究企画管理体制が未整備だったため、連携が十分とはいえませんでした。

また、近年においては、我が国を取り巻く安全保障環境の急激な変化、IT 技術に代表される科学技術の進歩によりもたらされる戦闘様相の変化及び空自への社会の要請の変化に応じられる組織及び活動の在り方が一層重要になってきました。

加えて、東日本大震災や BMD（弾道ミサイル防衛：Ballistic Missile Defense）への取り組みを通して、教訓業務（教訓の作成、普及及び管理）を専門的に行う部署の必要性が高まりました。

これらを受けて、将来起こり得る各種事態に有効に対処するために、ドクトリン研究、戦略理論研究、事態対処研究及び教訓業務を適切に行うことによる防衛方策研究機能の強化、すなわちシンクタンク的機能を有する新たな専門の部署が必要との結論に至りました。

空自が、変化に適切に対応し、限定された情報の中で、将来起こり得る各種事態に有効に対処できる航空防衛力の整備及び運用を実施するためには、透徹した鋭い知性が不可欠です。

いわゆる「戦場の霧」と呼ばれる不確実の中にあって、正奇の策を用いて常に主動を取るためには、透徹した鋭い知性をもって、練達な判断を行い的確に真実を感取しなければなりません。

この観点から、空自の知の泉源となる知的基盤として、将来の事態に備えるための調査研究を専門的に行うセンターを新設し、活用していきます。

センター新設に伴い、そこに所属する研究企画管理要員が航空幕僚監部防衛課に兼務配置され、航空幕僚監部と幹部学校の橋渡しとなる研究企画調整の窓口となります。この研究企画管理に基づいて、ドクトリン研究、戦略理論研究及び事態対処研究を推進していきます。

これらの調査研究を実施するためには、土台となる事項を確立せねばなりません。

主要国で使われているエア・パワーの定義を見てみると「航空、宇宙、情報システムを相乗的に活用して、戦略的に航空戦力を投射する能力」となっていますので、航空防衛力より広い概念と考えられますが、空自における明確なエア・パワーの定義は未だ確立していません。

主要国と同様の土台の上に、調査研究を発展させて行くためには、空自におけるエア・パワーの定義の確立が不可欠です。

その上で、センターが各種調査研究を実施し、その成果を知的資産として管理して、空自内外に広く発信することによって、航空防衛力の整備等の資とするとともに、航空自衛隊員の透徹した鋭い知性の獲得の資となることを狙うものです。

併せて、兵器体系研究の一環として戦術、戦技、戦法の研究を実施する航空総隊航空戦術教導団や人間科学研究を実施する航空開発実験集団との重層的な研究を目指すものです。

西洋史上初めて、神話的な要素を除いて戦争の歴史を書いたトゥーキュディデースは「この記述は、今日の読者に媚びて賞を得るためではなく、世々の遺産たるべく綴られた。」と普遍性を述べています。

また、どんなに優れた調査研究を行っても、時機を失することなく活用されなければ意味がありません。そのためには、信頼されることが何より大切です。

さらに、時代が違えば、それに応じて事情も異なりますから、世の価値観や人の価値観も変わることを踏まえて、柔軟に対応しなければなりません。

これらを踏まえ、センターの研究は、将来にわたって知的資産として語り継がれるものであると同時に、航空防衛力の整備等に直ちに活用し得る信頼性の高いものであるべきです。その際、時機を捉え、時代や環境の変化に適応した研究を、柔軟に続けて行くことが重要であると考えます。

また、組織は人です。複雑化する現代にあって、一つの概念や、一つの思想、一つの理論で物事を捉えることは困難です。一枚岩の「理想の組織」こそ失敗しやすいということに留意し、理論と実践による試行錯誤によって、より良い研究成果が生まれることを認識して欲しいのです。

その観点から、センターが多種多様な価値観や理論を展開できるよう、特に恣意的に特定の考え方を排除したり、知的なマスキングを作為することは避けるべきと考えます。

センター研究員に対しては、防衛の実務家としてだけではなく、歴史家としての気概をもって調査研究に取り組み、研究成果等を導出することを期待します。

歴史という言葉は、紀元前５世紀頃の事跡を書いたヘーロドトスの

『ヒストリアイ（歴史）』から生まれました。ギリシャ語でヒストリアは「調査研究してわかったこと」という意味であり、その複数形がヒストリアイです。この語がそのまま歴史になりました。単に過去の記録を集めても歴史にはなりません。

歴史は、必然と偶然の組み合わせの結果だと思います。歴史を動かすのは、利益とパワーだけではなく、名誉や恐怖、希望といった人間心理（集団心理や時代精神を含む。）も大きな要因となります。

思い込みや固定観念に縛られることなく、誠実で見識のある防衛の実務家かつ歴史家として、幅広い視点をもって調査研究に取り組んで下さい。

調査研究は、日々の積み重ねです。それは徳の修養に似ています。どちらも、養うのは百年かけても足りないくらいです。センターの研究においても、日日に新たに不断の努力を望みます。

そして、センターが、将来の事態に備えるために、空自の英知を研ぎ澄まして知的基盤として極めることによって、航空防衛力のさらなる発展に寄与することを望んでやみません。